

東京国立近代美術館工芸館移転整備
旧陸軍 第九師団司令部庁舎・金沢偕行社 見学ツアー



第九師団司令部庁舎

金沢偕行社

平成30年5月19日(土)・20日(日)
石川県

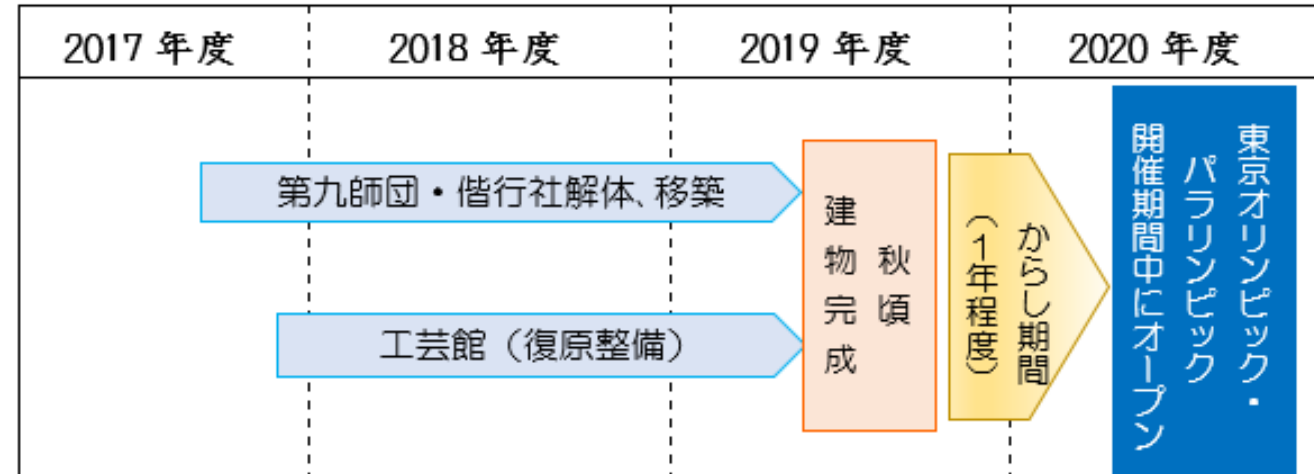
東京国立近代美術館工芸館の整備

東京国立近代美術館工芸館は、国の地方創生施策の一環である政府関係機関の地方移転の提案募集に対して、「工芸王国・石川」とも呼ばれる本県にふさわしい施設として提案した結果、これが認められて2016年3月に移転が決定し、**日本海側初の国立美術館が誕生**することとなりました。

移転先となる建物は石川県と金沢市が協力して整備することとなっており、国の登録有形文化財である旧陸軍の第九師団司令部庁舎と金沢偕行社を移築・活用し、過去に撤去された部分も含めて、かつてあった姿で復原します。

2019年度秋までに建物を完成させ、その後、展示室や収蔵庫が適正な環境となるまでの「からし期間」を経て、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催期間中のオープンを目指します。

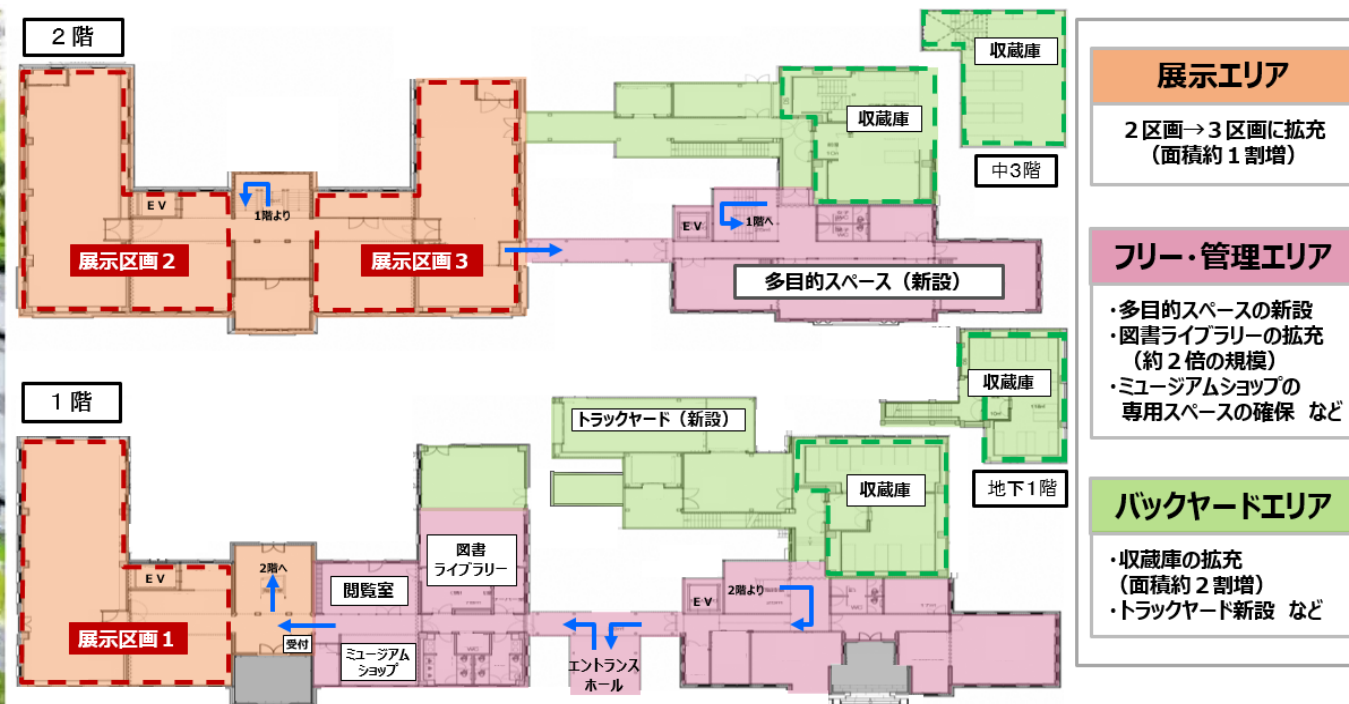
<整備スケジュール>



<鳥瞰図>



<平面図>



第九師団司令部庁舎



解体前



明治42年

「石川県写真帖」明治42年、石川県より

文化財区分 国登録有形文化財
 年代 明治31年(1898)金沢城二の丸跡地に建設、昭和43年(1968)移築
 構造形式 木造二階建
 建築面積 274.4m² 延べ床面積 549.0m²
 概要 近代洋風建築。全国でも数少ない明治期に建てられた旧陸軍の施設

建造物略年表

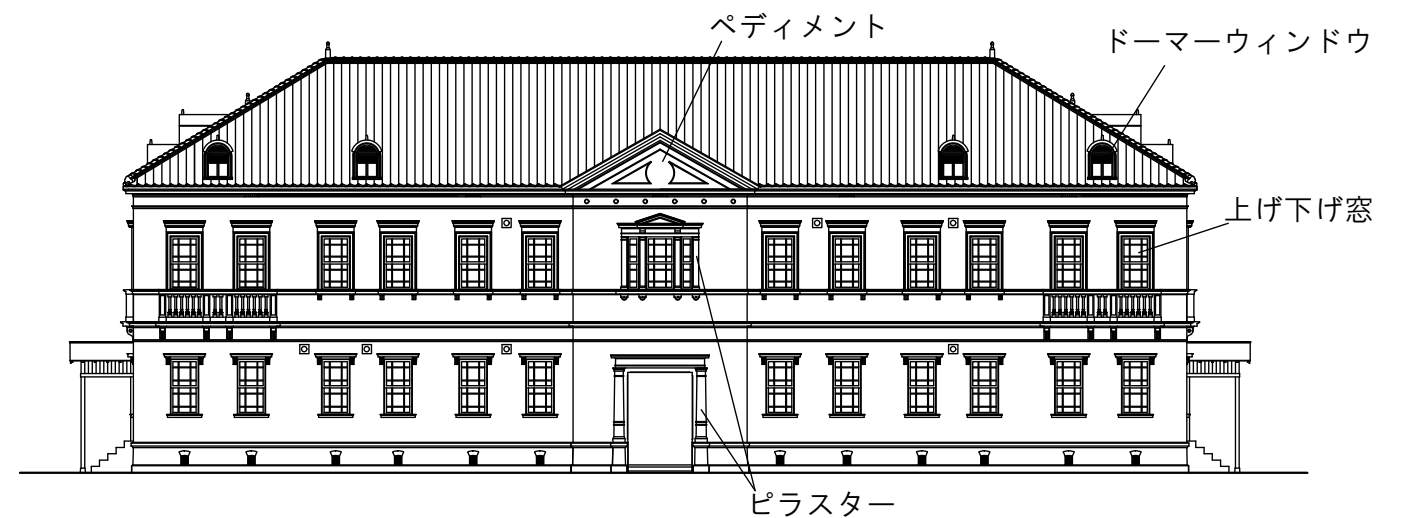
明治31年(1898)	金沢城二の丸跡地に建設
昭和24年(1949)	金沢大学本部として使用
昭和43年(1968)	県が建物を購入し、現在地に移築。その際、両翼を撤去
昭和45年(1970)	石川県健民公社(石川県県民ふれあい公社)が使用
平成9年(1997)	国登録有形文化財に登録
平成16年(2004)	歴史博物館収蔵庫として使用

外観の特徴

左右対称の構成で、正面中央は付柱(ピラスター)、三角形の切妻壁(ペディメント)で表現され、二階正面と側面の角の上げ下げ窓下には装飾が施されるなど簡素なルネサンス風の外観をしています。

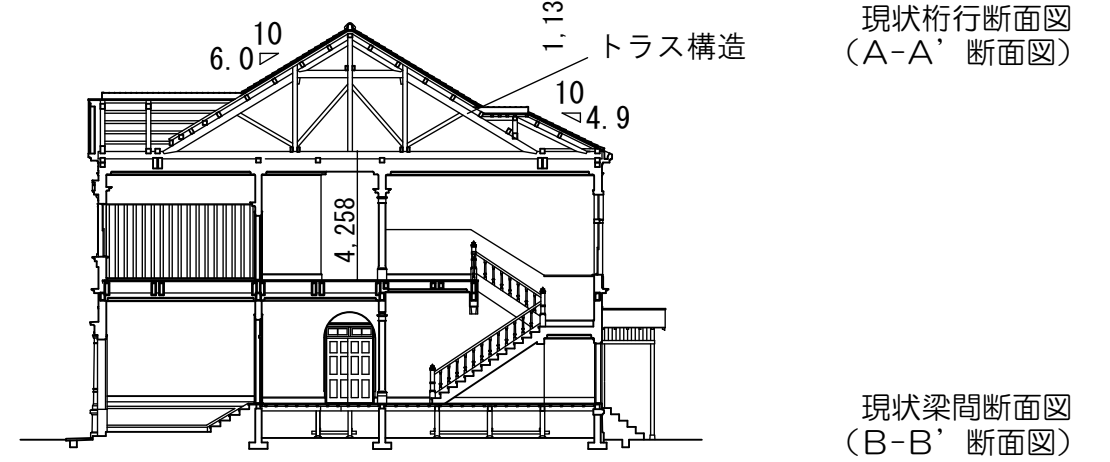
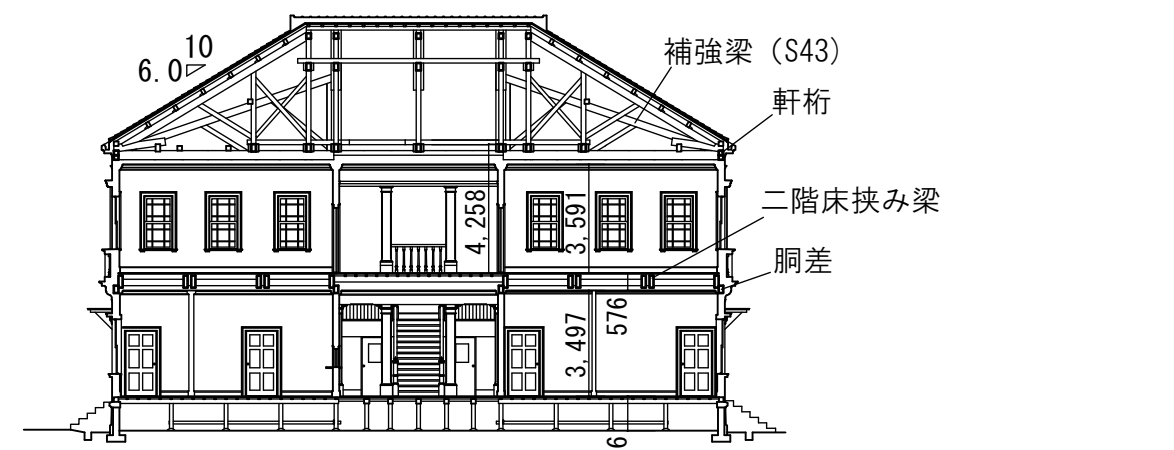
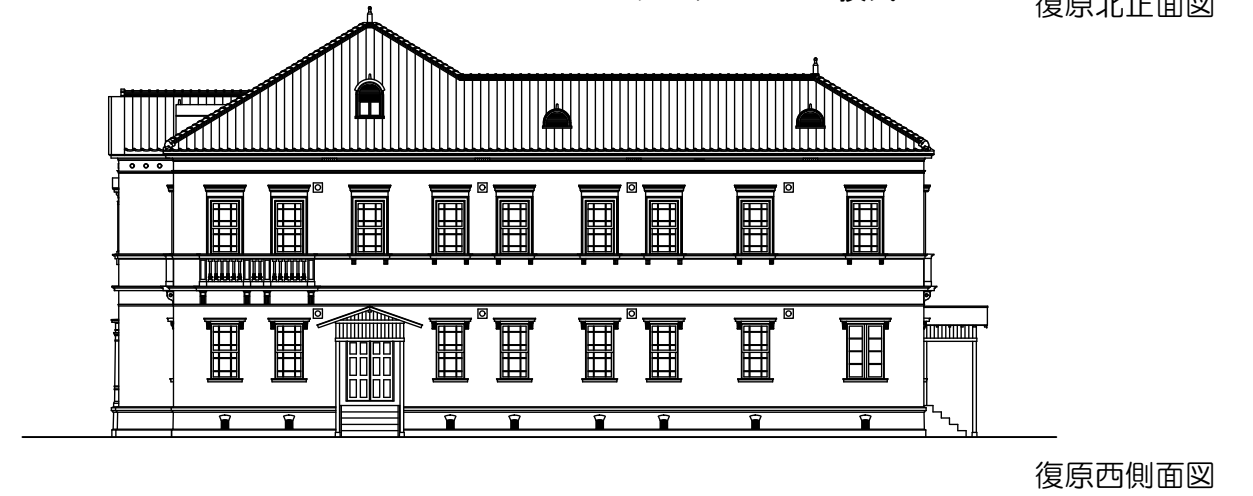
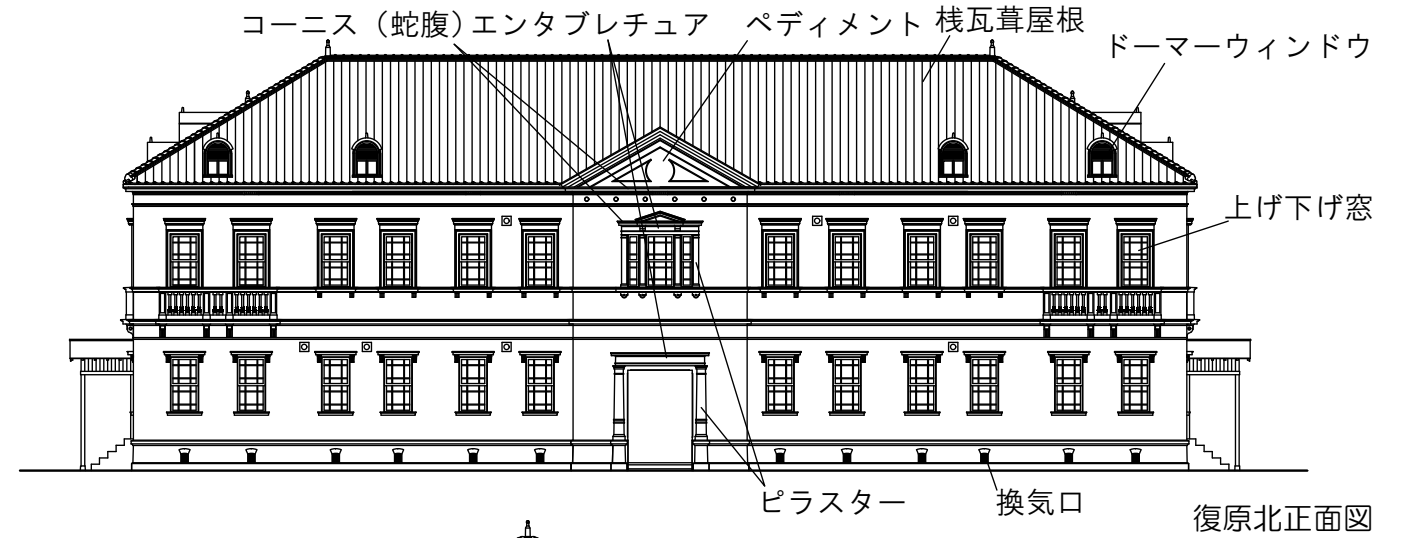
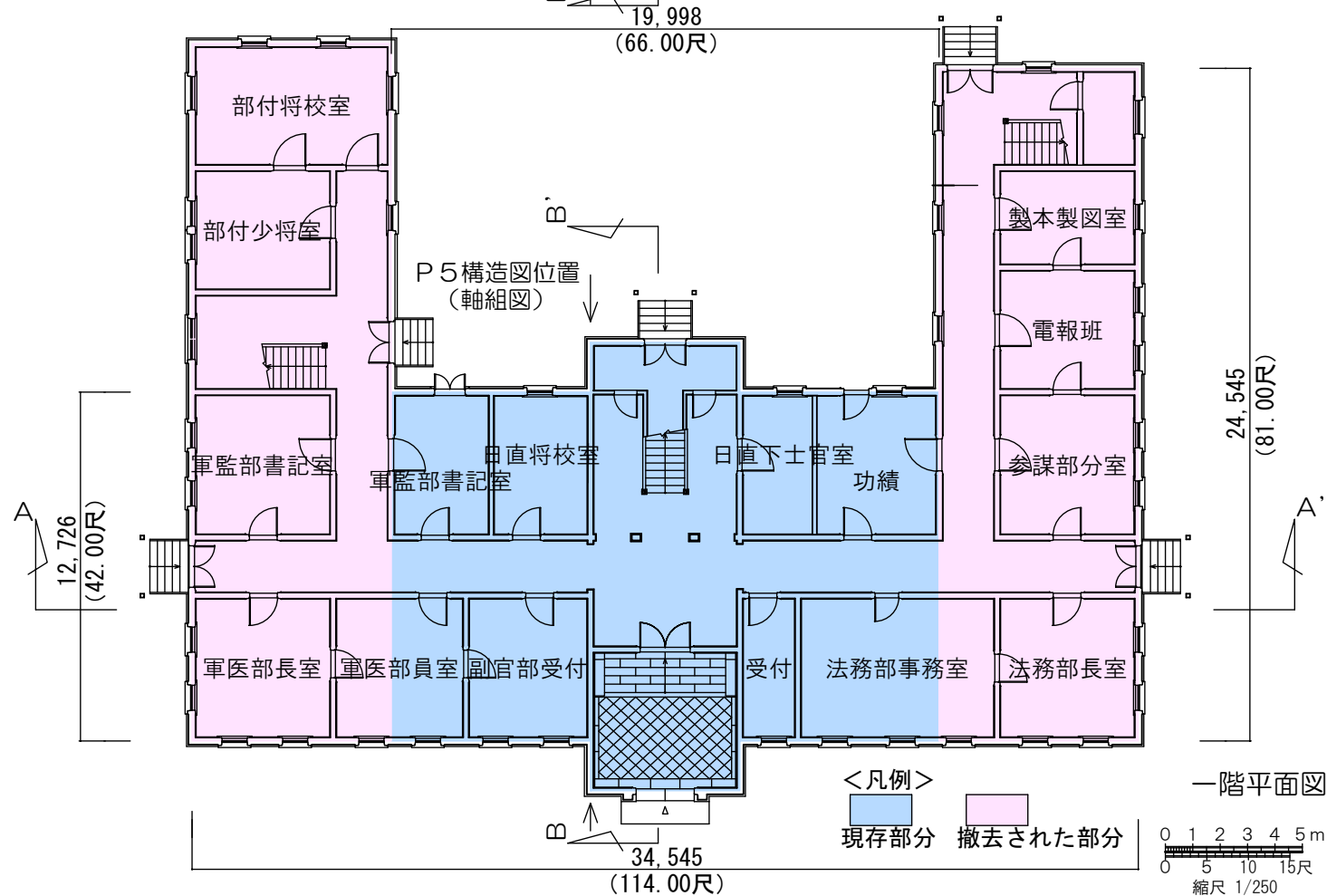
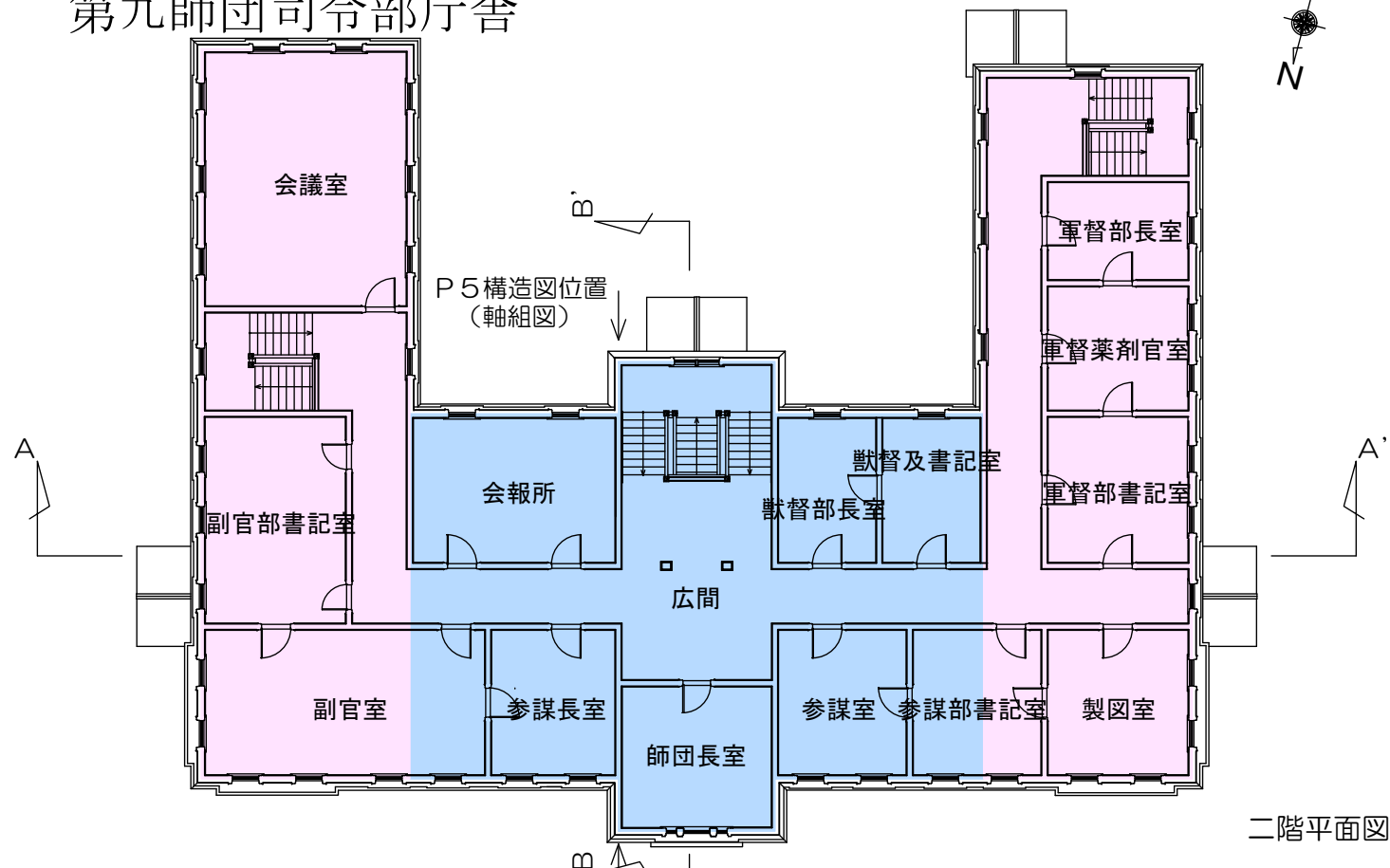
屋根は瓦葺で当初は装飾として換気のための窓(ドーマーウィンドウ)が設けてありました。

庁舎のため偕行社に比べて質素な外観になっています。



復原北正面図

第九師団司令部庁舎



第九師団司令部庁舎



玄関ホール

1 エントランスホール・階段室

正面中央入口にエントランスホールと階段室を設けています。エントランスホールには天井の漆喰レリーフや、アカンサスの葉をあしらった漆喰の柱頭飾りを施し、両脇にはアーチを設けて階段室前の空間を演出しています。

階段室は中央に樫（けやき）の重厚な階段を配置して踊場から両脇に折り返す大きな空間を作っています。

このような空間構成は明治期に導入された洋風建築の特徴であり、師団司令部庁舎は旧陸軍経理部で設計されたため、各師団司令部庁舎に類似の仕様が見られます。



天井装飾



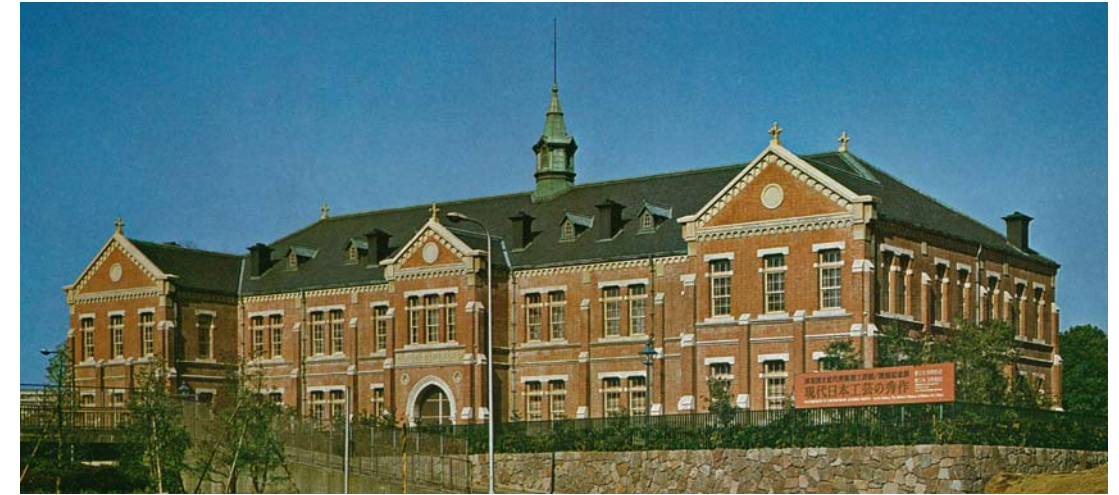
柱頭飾り



階段室

階段だけ樫

現東京国立近代美術館工芸館（旧近衛師団司令部庁舎）



東京都千代田区 北の丸公園内

「重要文化財旧近衛師団司令部庁舎
保存整備工事報告書」より



現乃木資料館

（旧第十一師団司令部庁舎）



香川県善通寺市 陸上自衛隊内



2 建物の構造 (軸組・小屋組) しくぐみ

軸組・小屋組とも明治31年の建設当初の部材がしっかり残っていて、師団司令部庁舎という軍の重要な施設であることから、偕行社より太い部材を使っています。

1) 楣 (まぐさ)

階高 (かいだか) が約4mと一般的な木造住宅の約3m弱と比較しても高いことから、構造を補強するため、中間に楣 (まぐさ) と呼ばれる横方向の大きな断面の部材を入れる特徴が見られます。

2) 挟み梁

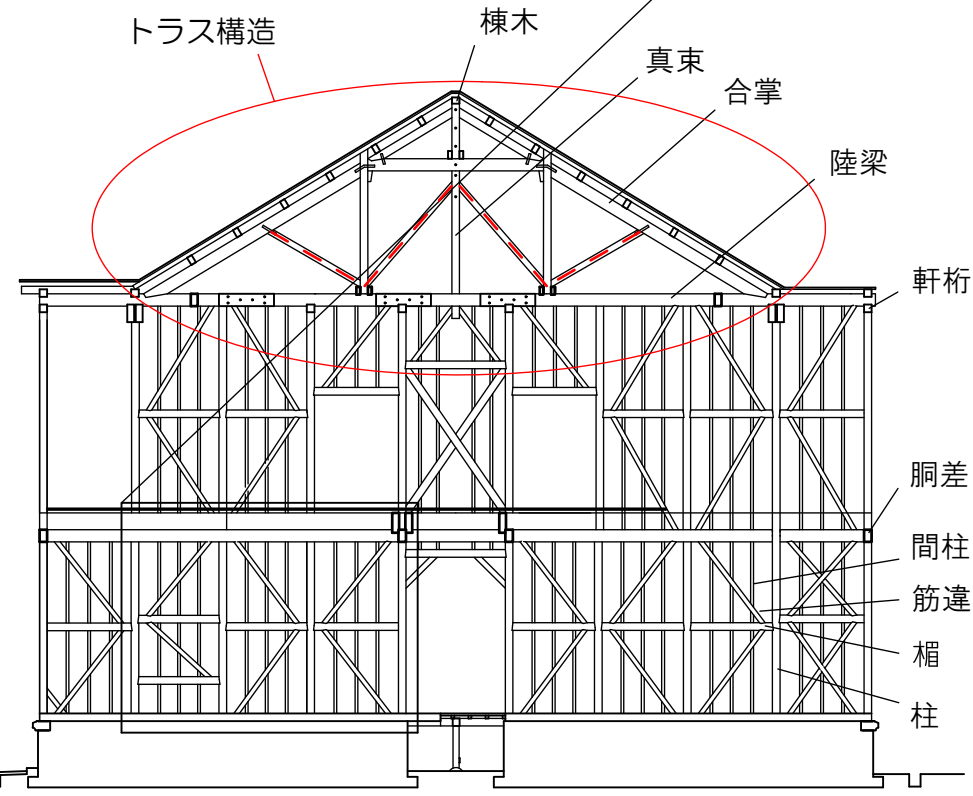
二階床を支える梁 (横方向の部材) は二階柱を挟み込んでボルトで固定する特徴が見られます。当時の日本家屋では見られない技法です。

3) 鉞 (まさかり)・手斧 (ちょうな) 加工

軸組の柱などには明治31年建設時の鉞 (まさかり) や手斧 (ちょうな) の加工痕を見ることができます。当時は一般的でしたが今では見られない技法です。

4) トラス構造

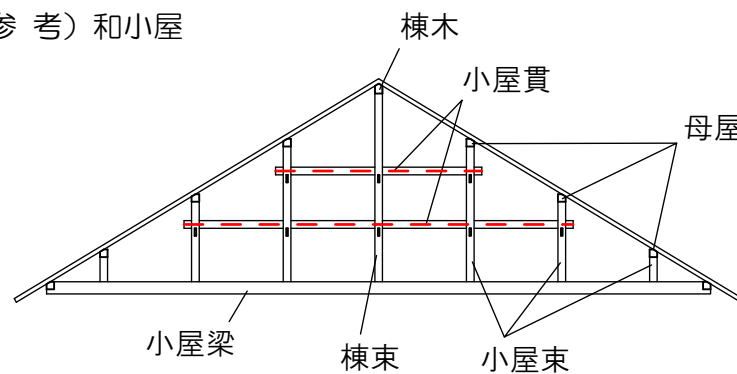
小屋組は西洋から入ってきたトラス構造を採用しています。当時の日本家屋では見られない技法です。(日本の在来の小屋組は小屋束と貫で構成されます。下図参照)



柱：杉 152mm (5寸) 四方
 梁：松

構造説明図 (梁間方向)

(参考) 和小屋



柱と楣 (軸組)

楣



挟み梁 (二階床梁)

挟み梁



解体番付 「柱リノ又十五」
 全ての部材に番付を打って解体します

柱(杉)の鉞・手斧加工痕

金沢偕行社



解体前

文化財区分 国登録有形文化財
 年代 明治42年(1909)建設、昭和45年(1970)曳家
 構造形式 木造二階建
 建築面積 281.2m² 延べ床面積 544.1m²
 概要 近代洋風建築。全国でも数少ない明治期に建てられた旧陸軍の施設
 「偕行社」とは、陸軍の将校集会所(将校クラブ)のこと。軍装品の販売所や将校たちが娯楽に興じる遊戯室があったと伝えられる

建造物略年表

明治17年(1884)	金沢偕行社創設(大手町)
明治42年(1909)	現在地付近に建設(講堂として金沢城内の将校集会所を移築するとともに本館を新築)
戦後	北陸財務局と金沢国税局が使用
昭和42年(1967)	県が建物を購入
昭和43年(1968)	旧講堂部分を解体撤去
昭和45年(1970)	現在の敷地内で曳家 郷土資料館(現:歴史博物館)の収蔵庫として使用
昭和55年(1980)	県公園緑地課が使用
平成8年(1996)	石川県道路公社が使用
平成9年(1997)	国登録有形文化財に登録
平成18年(2006)	歴史博物館収蔵庫及び能楽堂控室として使用



明治42年

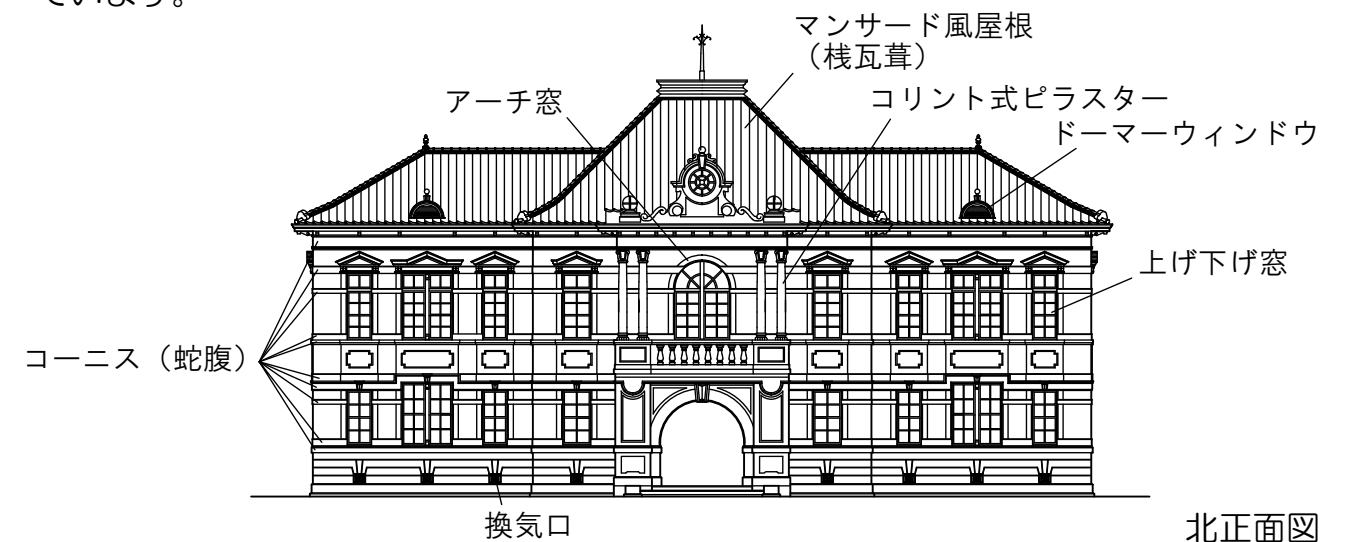
「金沢写真案内記」明治42年より

外観の特徴

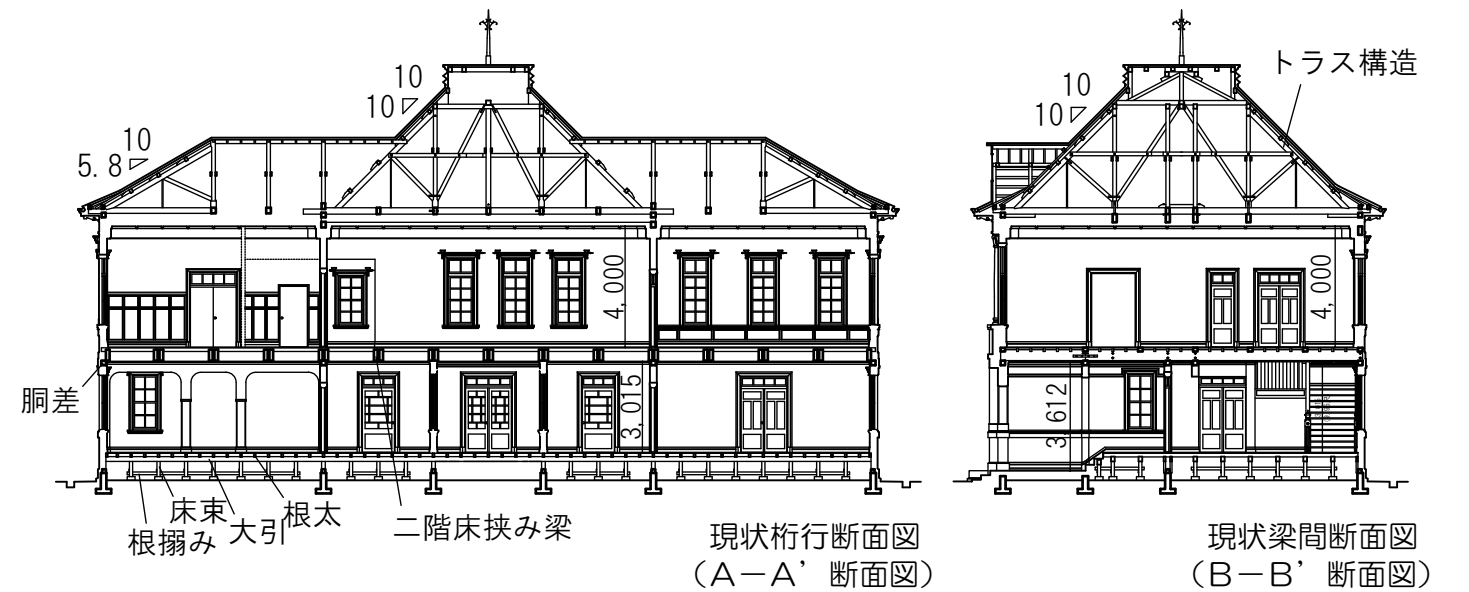
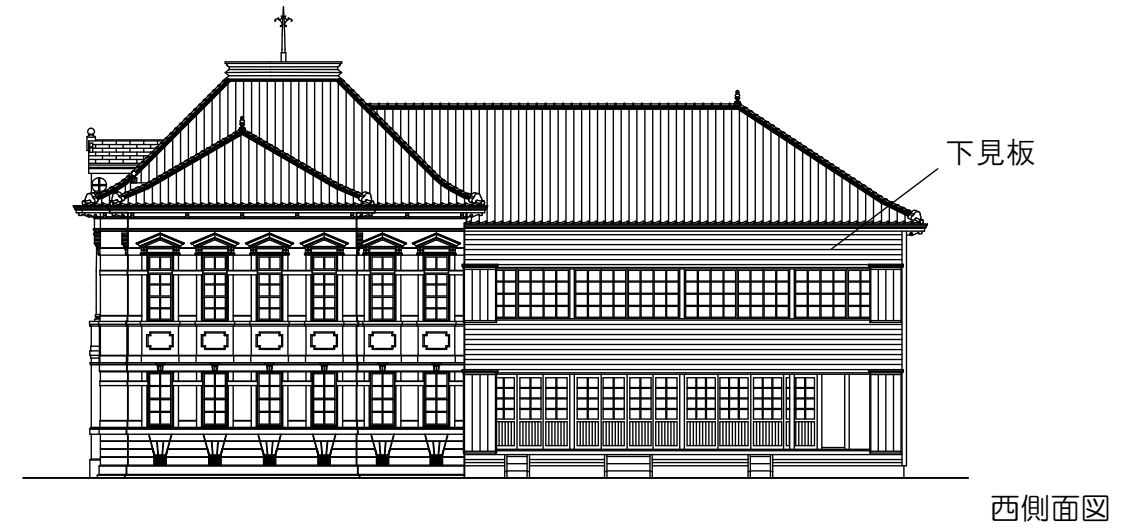
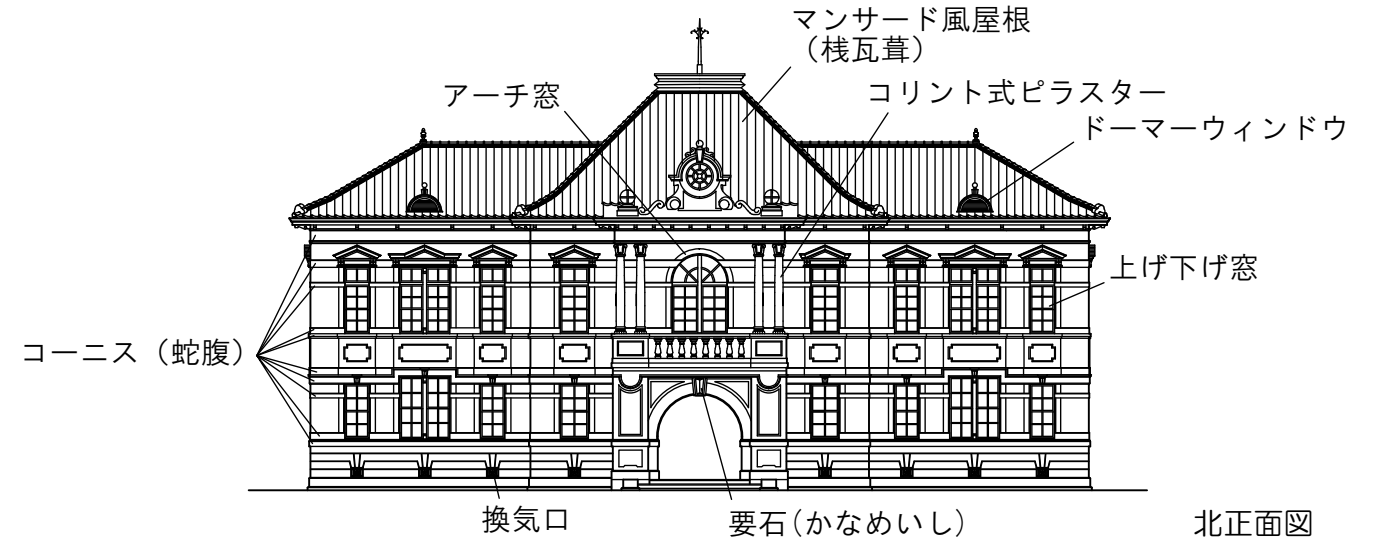
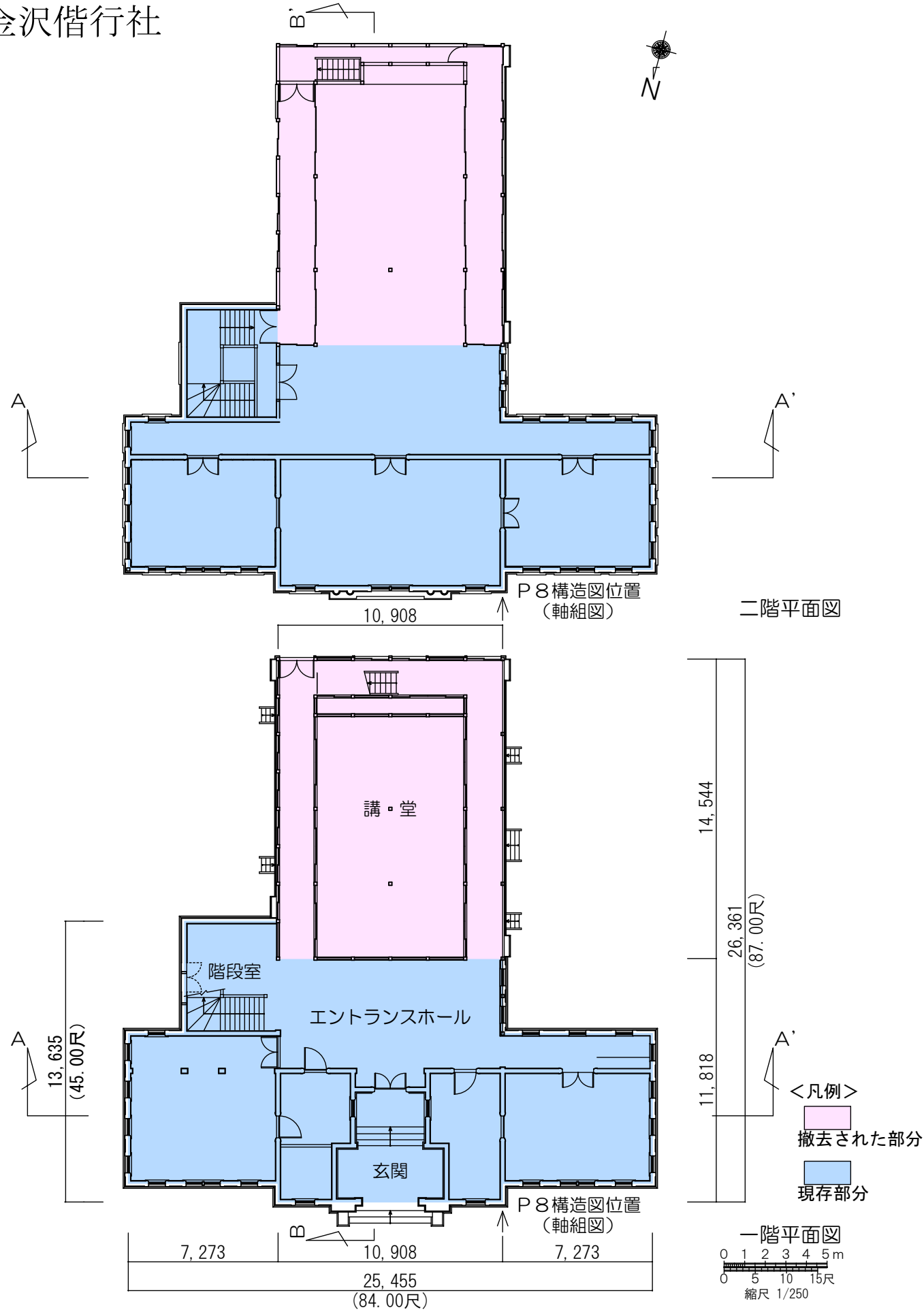
明治31年に建てられた第九師団司令部庁舎に対して、金沢偕行社は11年後の明治42年に建てられており、主要な構造は類似していますが、外観の意匠に工夫をこらしています。

正面にアーチ形玄関、円柱形の付柱(ピラスター)、二階上部のアーチ窓、三角形のペディメントが付いた上げ下げ窓、横方向の部材(コーニス)を多く入れて水平線を強調するなど、バロック風の技巧的な装飾を用いた華やかな意匠としています。

屋根は瓦葺で、中央部は急勾配で上部が水平になっているマンサード風屋根になっています。



金沢偕行社



金沢偕行社



玄関

1 エントランスホール
 ・二階ホール

正面中央入口に扉前の空間やエントランスホールを設けています。

エントランスホールは講堂への前室でもあり、天井には漆喰のレリーフが施されています。

二階ホールは昭和45年に曳家した際に大きな部屋を作るために柱を抜いたため、補強の梁を入れています。



エントランスホール



二階ホール



二階ホール小屋組

補強梁

2 建物の構造（軸組・小屋組）

軸組・小屋組とも明治42年の建設当初の部材がしっかり残っています。

1) 楣（まぐさ）

偕行社も師団司令部庁舎同様、階高が約4mあり高いため窓の上下などに楣を入れて補強しています。

2) 挟み梁

師団司令部庁舎と同様、二階柱を挟み込んで二階床を支えています。

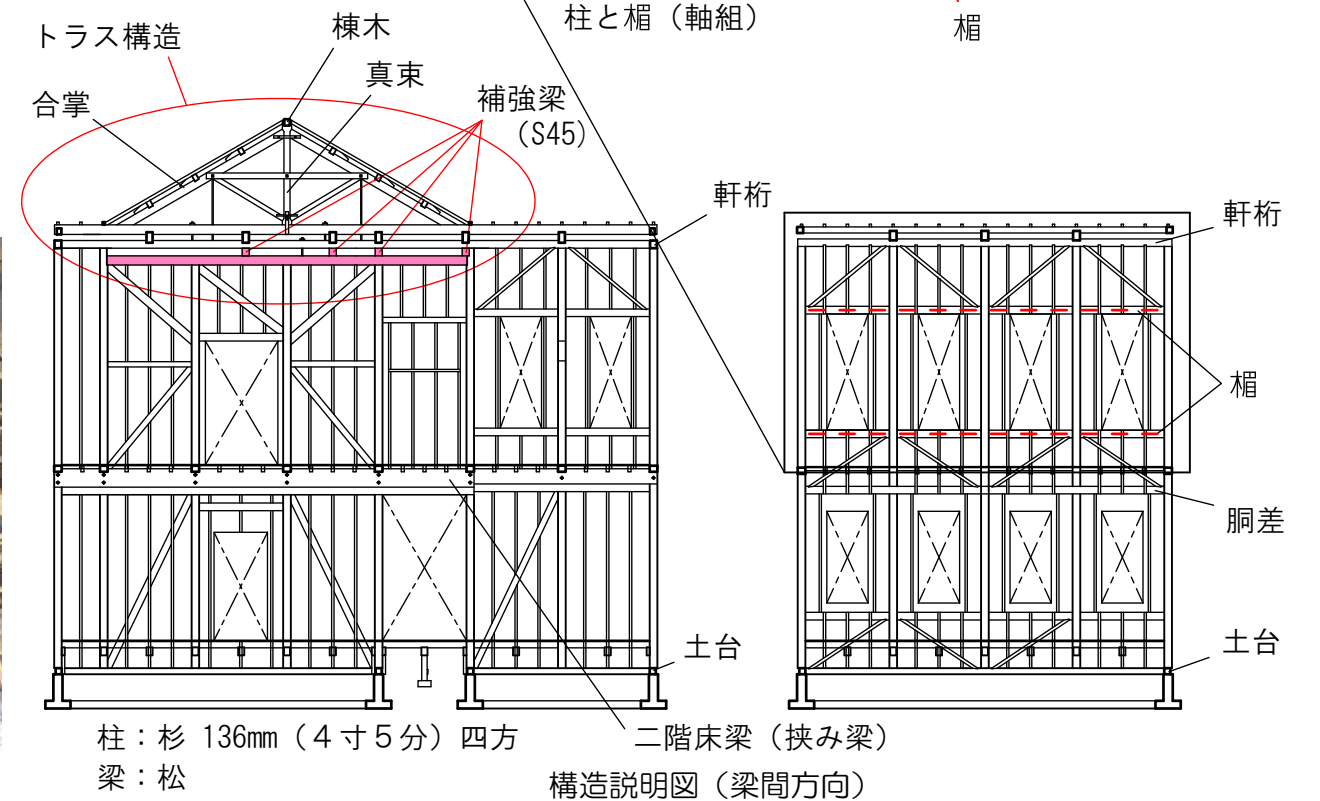
3) トラス構造

師団司令部庁舎と同様、小屋組にトラス構造を採用しています。



柱と楣（軸組）

楣



3 講堂の下見板痕跡

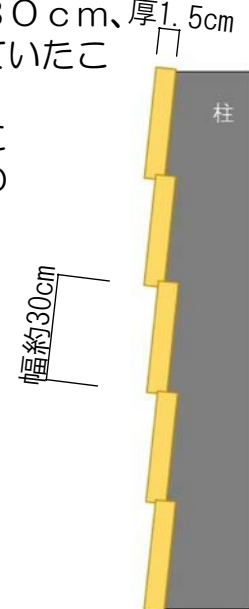


偕行社・講堂側面 (昭和43年)

(個人蔵)

図面や写真から講堂の外観は、引き違い窓に下見板張りの板壁であると推察されていましたが、今回の解体工事により、柱に下見板を取り付けた痕跡が確認され、幅約30cm、厚さ1.5cmの下見板が取り付けられていたことが分かりました。

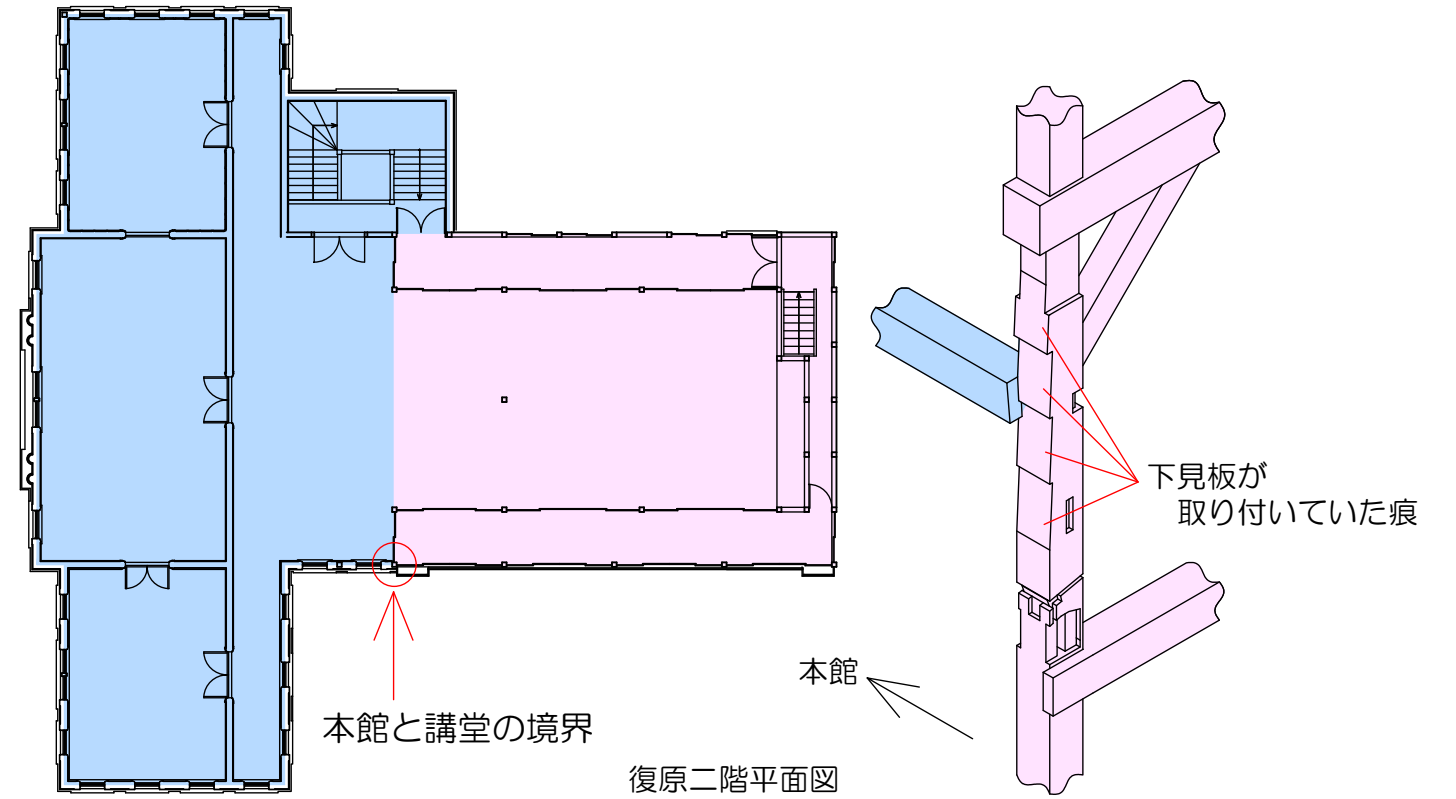
移築整備する工芸館では講堂部分についても外観を復元するため、講堂の姿が再現される予定です。



下見板説明図



下見板が取り付けられた痕跡



4 上げ下げ窓

洋風建築の特徴の一つに上げ下げ窓があります。上げ下げ窓は、縦の窓枠に滑車を付け、窓枠の外側に分銅をぶら下げて窓を上げ下げしやすくするとともに落ちてこないようにしています。

